

2015年11月22日 MJCC 主日礼拝メッセージ（要約） 柏倉秀吉師

聖書：マルコ1：21-28

タイトル：「 教えと評判 」

マルコ 1:21-28

イエスがガリラヤ湖のほとりからアンデレ、シモン、ヤコブ、ヨハネに声を掛け、彼らを弟子として召された後、一行はカペナウムへ行った。そして安息日に会堂へ入り、イエスは人々に教えられました。

ユダヤ人たちが安息日に会堂に集い礼拝を捧げるとするのは、旧約聖書時代から現代まででも何千年も続けられており、彼らにとってはごくごく当たり前のことで、わざわざ呼びかけなくとも自分から礼拝を捧げるために集ってくるのである。これは私達のこれまでのライフスタイルとはかなり違っている。これは私達が聖書から、そして彼らから学ばなければならないことの一つである。信仰の御基盤において私達にはどうしても彼らに追いつけないハンディキャップがある。

まずその信仰の基盤のようなものがユダヤ社会にはあったのである。これは素晴らしいことである。それゆえ彼らの中には聖書の御言葉、当時は旧約聖書だったが、その教えが普段から広く浸透していたことが分かる。そしてそのために用いられていたのが、「律法学者」たちであった。

さて、この日イエスが彼らに教えられた時、その教えが、これまでの律法学者たちとは違った！ということに彼らはすぐに気付いたのである。そしてここから宣教がさらに広がっていったのだが、21-22vには、イエスの宣教において非常に大切な部分が記されている。

その第一は、「カペナウム」という場所である。

この時イエスは弟子たちを連れてこのカペナウムの会堂で御言葉を教えられたが、イエスがこのカペナウムで御言葉を教えられたのは、この時だけではなくイエスの宣教の拠点としてこのカペナウムは、非常に重要な場所であった。それは、この後の聖書に出てくる数々の御業を見れば良く解る。

カペナウムとは、新聖書辞典によれば（一部抜粋）、

『（〈ギ〉 Kapharnaoum） 〈へ〉 ケファル・ナフーム（「ナホムの村」という意味）に由来する。ガリラヤ湖の北西岸にある町。イエスの宣教のうち最も重要なガリラヤ伝道の本拠地となった（マタ4：13，マコ2：1）。聖書の中ではこの町は福音書だけに出てくる。旧約聖書に出てこないところから、バビロン捕囚後に建てられたものと思われる。ローマ軍の駐留地であり（マタ8：5-8），収税所があった（マコ2：14）（それだけ人もたくさんいて、随分栄えていたであろう）。12弟子のマタイもここで召し出されました（マタ9：1）。また、イエスはここで、中風にかかった百人隊長のしもべの癒しや（マタ8：5-13），熱病で寝ていたペテロのしゅうとめの癒し（マタ8：14-15），汚れた霊につかれた人の癒し（マコ1：23-26），4人の者に運ばれて来た中風の男の癒し（マコ2：1-12），その他多くの病人（マタ8：16-17）を癒した。5000人の給食後のいのちのパンの説教（ヨハ6：26-59）や他の多くの説教はカペナウムの会堂で、あるいはこの町のどこかでなされた（マコ9：33-50）のである。イエスの宣教にとってそれほどこのカペナウムは重要な場所であった。』

しかし、このようなイエスの教えと行いにもかかわらず、この町の人々が悔い改めなかったので、イエスはこの町が滅びることを預言した（マタ11：23-24，ルカ10：15）。そしてこの預言は成就し、現在では廃墟となっている。

ティンデルの注解書には、この様に記されている。

『カペナウムは、不信仰な誇り高き町であり、裁きの日にはツロヤシドンの方がはるかにましであった（マタイ11:23-24）。』

そして、続けてこの後の23v-の悪霊の追い出しのことにも関連して、続けてこのように記されている。

『汚れた霊につかれた人が、イエスに出会うまで会堂において少しも不一致を感じないで礼拝することが出来、また明らかにその苦しみから解放されることを自分から望んだのでは無かったというのは、カペナウムの霊的状况を奇妙に示している。』

カペナウムとは、確かに、福音書以降の『使徒の働き』以降からは、このカペナウムという町は一度も出てこない。

あのイエス様がこれほど熱心に宣教活動されたにもかかわらず、このカペナウムの人々は、悔い改めなかったのです。そしてついに聖書の舞台からも消えていったのである。

この出来事を思うと、人間とは、実に傲慢であるということが言える。

・・・・・・・・

私はこうした箇所を読むと、『あのイエス様に直接御言葉を語られ、しかも目の前でたくさんの奇跡を実際に見ているんだから、私だったらすぐに絶対に信じる！！』と、簡単に言えるだろうか？そして、実際に信じた者としての行動を行っていたであろうか？と、いつも自問させられる。

またもう少し言い方を変えれば、「実際に当時自分がその場所に生きている者だったならば、果たして本当に、自分の目で見ているイエス様を「お！この人は神だ！来るべきメシヤだ！」などと思えたであろうか！」と、考えさせられる。そしてその答えはいつもNoである。自分を素直御認めると本当に心が汚い！と認めざるを得ない。

だからこそ、今信じているこのイエス様を！決して見失うことが無いように！、どんな時も、イエス様を自分の前に置いて、歩ませていただきたいと日々祈っている。また私の内に生きておられる聖霊様ご自身も共に祈ってくださっているということを感じ、本当に感謝しているのである。

おそらく私だけでなく、そしてカペナウムの人々だけではなく、実に簡単に神から離れていってしまうのが私達人間ではないだろうか。私達は例外なくそのような罪人であるということが言えるだろう。

だからこそイエスは熱心に何度も何度も御言葉とそして奇跡をこのカペナウムの人々に示してこられた！ということである。

それが、このイエスと弟子たちが訪れた「カペナウム」という場所であった。このことからこの現代についていえば、メルボルンもある意味、カペナウムといえるかもしれない。今は栄えて華やいでいるが、人々が悔い改めなければ、廃墟となることもあり得るだろう。

私達はその為に「時が良くても悪くても福音を宣べ伝える」事が大切である。

そしてこの国のため、この地域のため、この街のため、そして人々のために、私達は祈らなくてはならない。

ではそのために私達は普段から一体どれくらいの時間をかけて御国の拡大のために労しているだろうか。普段から自らを省みる者でありたい。

二番目に「律法学者」ということについて考えたいが、イエスは絶えずこの律法学者、そしてパリサイ人やサドカイ人達と対立している。

一般的に律法学者とは、バビロン捕囚以後に出てきた言葉と見られる。前6世紀のエルサレム神殿の崩

壊と、南ユダ王国の滅亡により祖国を離れたユダヤ人は、居留地での自分たちの信仰生活を守らなければならなかったのである。そのために、やがてこうした会堂（シナゴグ）が神殿にとってかわり、ユダヤ教の信仰生活の中心的な役割を果たすようになったのである。またいったい自分たちに与えられている律法とは何か？ということを確認するために出てきた専門的な人々が律法学者である。その中で有名なのがエズラである（エズ7：6）。

さて、こうした律法学者たちによって、当時のユダヤ人社会の人々は多かれ少なかれ律法を知るようになった。それだけではなく、彼らは、学校や会堂、またそれぞれの家庭で子弟教育も行ったのである。それは何よりイスラエル人がみな律法にかなう者となるために彼らが非常に熱心だったからである。しかし、一方で彼らは律法の持つ「真意」というものを見失っていき、ただそのことを守るか守らないかということだけに熱心になっていたのである。（ルカ6：6 - 11等）。そのことをイエスは彼らに指摘していたのである。

また、この律法学者たちは、自分たちの教えがいかに正当であるか！ということ伝えるために偉大なラビ（教師・指導者）の名前も引用し、またその教えに依存するようになっていた。もしかすると「私のこの教えは、偉大なラビ〇〇の教えである・・・」というように、教えていたかもしれない。ある意味彼らは御言葉の真意に気づけず、御言葉の確信が弱かったのである。

さて、そんな中イエスは確信に満ちて「権威ある者のように教えられた」のである。

これが三番目に考えたいことである。

では「権威ある者のように教えられた」とは、いったいどのようなことだったのか。

23-27v

ここには、汚れた霊につかれた人がいたことが記されている。汚れた霊につかれていても彼は会堂で礼拝を捧げていたのは驚きである。この「汚れた霊」という意味は、善であり、聖い神であるお方に対して、逆らう者、悪い者、汚れた者であるという意味であるが、それはさらに人をも神に逆らわせ、悪や汚れに引きずりこむ力を持っているということである。

私たちの中でも、こうした悪と汚れに引きずり込まれていくような心の葛藤を経験した人は多くいるのではないだろうか。

箴4:23にはこのように記されている。

「力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく。」私達は汚れた霊に支配されないように自分の心を御霊、聖霊様によって見張るということが非常に大切なことである。

さて、自然科学が発達し、医学的な知識が飛躍的に増した今日目で見れば「汚れた霊とかそういった悪霊つき」というのは、精神的な病に過ぎないという主張がある。また、聖書時代のような近代科学以前の人々の世界観に生きる人々は、異常なものはなんでも悪霊の働きにした。ということも言われることがある。しかし、聖書は、病は病、悪霊は悪霊ときっちり分けている。そしてイエスはそのことをいつも見抜いていたのである。

これは決定的に、当時の律法学者たちにはできないことであった。

汚れた霊につかれた人がどのような状態にあるのかということ、神である御子イエスは、即座に見抜き「黙れ。この人から出ていけ」と言われた。この「黙れ」とは現代英語でいえば「シャラップ！」という言葉である。非常に強い言葉である。

またこの時会堂では多くの人々が礼拝を捧げていたが、本当の意味でこのイエスが神であるということ

を知っている者は、この汚れた霊以外にはいなかったのである。つまりこの汚れた霊は、普通の理解力を超えた知識を明らかに持っていたということである。イエスが言われた25「黙れ、この人から出ていけ」という言葉と、そしてそのことによって、実際に起きたこの後の26vの出来事というのは、明らかにこの世の理解力を超えたところにおいても権威に満ちた命令であったと言える。すなわち普通の理解力を超えた知識をもっていたあの汚れた霊でさえも、このイエスの言葉には恐れ、ひれ伏し、嫌顔でも従わざるを得ないそういった絶対的な命令を出せる権威がイエスにはあったということである。

人々はこのことを見て、27v「新しい教えではないか。…」とイエスを評価したのである。

「新しい」とは、言い換えれば「それまでとは違う」という様にも言えるだろうが、ユダヤ人たちはこれまで律法学者たちの教えを聞き、ある意味ではそれがマンネリ化していたことも考えられる。

使徒の働き17章には、パウロがアテネにいたユダヤ人たちとアレオパゴスの講堂で議論したことが記されているが、それがまさにそうであった。おそらくこのカペナウムの会堂でも、こうしたマンネリ化から来る、目新しいものへの欲求があったであろう。

そうした中で、このイエスが語られたこと、そして起こった出来事に、彼らは目を輝かせたのではないだろうか。

しかし彼らのイエスに対する評価、評判とはいったい何を求めたものだったのであるだろうか。いったいイエスの何に心が引き寄せられていたのだろうか。一方、イエスは、この会堂でいったい何を教えようとされていたのだろうか。そして何のために汚れた霊を追い出すというわざを行ったのだろうか

か・・・・。

それは福音書が初めから終わりまで抱えている「群衆」というものが求めている「ご利益」主義ということと、イエスが表している神の国の到来と神の圧倒的な臨在ということの違いといえるだろう。

イエス様はどこに行っても、どの会堂に行かれても、そして誰と話をしても、いつも現されるのは、神の臨在とその栄光である。しかし群衆は、誠の神とは繋がろうとはせずに、そこからこぼれ落ちてくるであろう癒しや奇跡といった、御業にのみに焦点をむけているのである。彼らの思いはいつも恵まれることである。ご利益を頂くことである。しかしイエス様は、神の栄光を表すために自分をしもべとして仕える者となったのである。

私達も目先の喜びや楽しみのためではなく、本当に心から主に仕えるしもべ、そして群衆ではなく、弟子として歩ませていただきたいと願わされるのである。それがイエスが教えた「教え」と群衆が与えた「評判」という違いではないだろうか。

私達はカペナウムの様に悔い改めないのではなく、また律法学者のように御言葉に確信が持てないような者ではなく、すべてを見抜き私たちの理解力を超えて圧倒的な権威を持つイエス様に従う者でありたい。